

## まえがき

原爆被爆者への医療は、日本の医療課題の中で、一つの必然として取り組まれ知見が蓄積されてきている分野だ。この課題への私のかかわりと医療上のまとめは先に上梓した『良い医療を求めて』——一臨床医の軌跡——に記したが、広島・長崎の被爆者は、世界中どこでも二度と被爆者を作らないでほしい、核戦争をおこしてはならない、核兵器を禁止してほしい、と訴えつづけている。被爆者への医療が社会的・政治的なことがらと深くかわる課題であることは容易に理解できる。

被爆者の健康管理を通して被爆者の心を知り、その心をわが身に重ね合わせながら生きようとする時、一臨床医として、また社会の中で生かされている一人の人間として、広島・長崎の健康障害などの実相を、社会に向かつて、国の内外を問わず、語らなければならないと思っている。被爆者と手を取り合つて、原爆のもたらした被害の非人間性・非人道性を告発し、核兵器の廃絶を求めて行動をしていくことが人生の欠かせないテーマとなっている。

そして言うまでもないが、私の生き方の根底には、日本国憲法の三つの柱——国民主権、戦争放棄、基本的人権——に基づく日本の社会のあるべき姿への希求がある。

原水爆禁止運動、核戦争防止国際医師会議（IPPNW）、核戦争防止千葉県医師の会、九条の会・千葉医療者の会などでの活動記録、その上さらに世界を震撼させたチェルノブイリ、そしてフクシマの原発事故に関する文章などをまとめたものが本書の主題である（第I部）。